# バカと文月とヤミ

今宵闇介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと文月とヤミ

【Ｎコード】
Ｎ６６５３Ｙ

【作者名】
今宵闇介

【あらすじ】
ある不運な出来事により最底辺に墜ちた高校生たちのバカこめでい？ときどきラブ？とにかくカオスな物語。

# 第1話「お前は…バカだ」ＢＹアイアンマン（前書き）

再投稿

## 第1話「お前は…バカだ」Ｂｙアイアンマン

僕の名前は明久。吉井明久。いたって普通の高校生だ。所属高校は文月学園。ちょっと変わった高校だ。

文月学園は進級テストの成績で厳しくクラス分けされる先進的な進学校。

秀才が集まる設備も整ったＡクラスに対して最底辺のＦクラスの設備はボロい卓袱台や腐った畳だけ。

ちょっと不公平だと思う。でも、試験高なため、学費が安い。僕にとってはうれしいことであり、この高校に進学した理由でもある。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

僕らがこの文月学園に入学してから2度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両側には新入生を迎えるための桜が咲き誇っている。

別に花を愛でるほど雅な人間ではないけど、その眺めには一瞬目を奪われる。

でも、それも一瞬のこと。

今僕の頭の中にあるのは春の風物詩ではあるけども、桜のことじゃない。

僕の頭は今年1年を共に戦い抜いていく戦友と教室――要するに新しいクラスのことで一杯になっていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「吉井、遅刻だぞ。」

玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。声のしたほうを見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

「あ、鉄じ―――じゃなくて、西村先生。おはようございます。」

軽く頭を下げて挨拶をする。何せ相手は生活指導の鬼、西村教諭だ。目をつけられるとロクな目に遭わない。

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ。」

「ん、そうか？」

ふぅ、やばかった。危うく普通に『鉄人』って呼ぶところだった。
ちなみに鉄人というのは生徒の間での西村先生のあだ名で、その由来は先生の趣味でもあるトライアスロンだ。真冬でも半そででいる辺りも理由のひとつだけど。

「それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろうが。」

「あ、すいません。えーっと――今日も肌が黒いですね。」

「・・・お前には遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

「そっちでしたか。すいません。」

「まったくお前というヤツは・・・いくら罰を与えても全然懲りないな。」

ため息混じりに先生がつぶやき・・・・・・・

何食わぬ顔で通り過ぎようとした男子生徒を捕まえた。

「おい、闇太。なに通り過ぎようとしている。遅刻だぞ。」

「・・・なぜお前は俺の気配がわかる」

こいつは、薄刃闇太（うすばあんた）、去年もいっしょだった友人の一人だ。気配を隠す、影を薄くする

など、隠密に長けた変わった人間だ。もうひとり似たような友人がいるが、そいつとはちょっと違う。

「お前も悪餓鬼の一人だからな。俺は生活指導担当だ。悪餓鬼ならばどれだけ気配が薄くとも近くにいればわかる。」

なにその無駄だけどすごい特技。すごく迷惑なんですけど。

「くそっ・・・」

「まぁ、とにかく、ほれ。お前らのクラスだ。」

そういうと鉄人は封筒を渡してきた。宛名の欄にはそれぞれ、『吉井明久』『薄刃闇太』と書いてある。

「あ、どーもです。」

「感謝する。」

一応頭を下げて受け取る。

「それにしても、どうしてこんなに面倒な方法でクラス編成を発表しているんですか？掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに。」

こうやっていちいち全員に所属クラスを書いた紙を渡すなんて、面倒なだけだと思うけど。ご丁寧に一枚一枚封筒に入れてあるし。

「普通はそうするんだけどな。まぁ、ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験高だからな。この変わったやり方もその一環ってわけだ。」

「ふーん。そういうもんですかね。」

ちなみに、ここ文月学園は、クラスがAからFまであり、二年生以上はAから順に振り分け試験の成績順でクラスが決まっていく。頭のいい人はAクラス、悪い人はFクラス、といった具合だ。つまり所属しているクラスだけで頭の良し悪しがわかってしまう。男のプライドにかけて、Fクラスだけは避けたい。

そうおもってる横で闇太が封筒を開ける。が、なかなか糊が頑丈みたいで、どこからともなく取り出した八方手裏剣で封を切っている。・・・持って来ていいのかな？それ。

結果は・・・

『薄刃闇太・・・Fクラス』

「・・・なぜだ・・・出来は良かったはず・・・」

「闇太、お前運がないのか知らんが、点数は（・・・）良かったぞ。だがな、名前を書き忘れてどうする。無得点だぞ。」

「くっ・・・任務に支障が・・・クライアントの信頼が・・・がぁぁぁぁぁぁ！」

あ、闇太が崩れ落ちた。言ってることが少し危ない気がするけど。

まぁ、少し経ったら復活するだろうし、自分のクラスでも確認しよう。

「吉井、今だから言うがな。」

鉄人が声をかけてきた。

「はい、なんですか？」

闇太のもそうだったけど結構頑丈に糊付けされているな。うまく開かないや。

「俺はお前を去年一年間見てきて、『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ。」

なんて事を。

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、さらに『節穴』なんてあだ名をつけられちゃいますよ？」

自分で言うのもなんだけど、一年生の最後にやった振り分け試験は、あまり勉強しなかったのにいい出来だった。テストの結果を見て、きっとバカの疑いどころか逆に、僕のことを見直したに違いない。

「ああ、振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づいたよ。」

「そういってもらえるとうれしいです。」

やっぱりうまく開かないや。仕方ない、上の方を破くか・・・あ、そうだ。闇太が持ってた手裏剣貸してもらうか。

「闇太、手裏け－－－ってまだ放心状態なの！？まいいや、貸してもらうよ。」

そういって闇太から手裏剣を貸してもらう。それで破くと中には一枚の紙が入っていた。

さて、僕は一体どこの所属だろう。Dクラスだろうか。それともCクラス？

「喜べ、吉井。お前への疑いはなくなった。」

折りたたまれた紙を開き、書かれているクラスを確かめる。

『吉井明久・・・Fクラス』

「お前はバカだ。」

## 第1話「お前は…バカだ」ＢＹアイアンマン（後書き）

少しづつ改訂しながら投稿していきます。
ストックがなくなったらすこし遅くなる予定。

## 第2話「ぷ～ん」BY異臭を放つ布切れ（前書き）

弱改訂。

## 第2話「ぷ～ん」ＢＹ異臭を放つ布切れ

明久サイド・・・

「なんだろう、このばかでかい教室は。」

去年はほとんど来たことのなかった三階に足を踏み入れると、まず目の前に現れたのは、通常の五倍はあろうかという広さを持った教室だった。

もしや、これが噂のＡクラスだろうか。ちょっと気になるな。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこのＡクラスの担任、高橋洋子です。宜しくお願いします。」

足を止めて大きめの窓から中をのぞいてみると、髪をお団子にまとめた、知的な女性代表みたいな人がいた。

彼女が告げると、黒板ではなく、壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示された。なんて贅沢な。こういう時なんていうんだっけ？

え～っと・・・・・そうだ！

「Ｈｏｗ　ｍａｎｙ？（いくつですか？）」

※・・・正しくはＨｏｗ　ｍｕｃｈ？（いくらですか？）です。

ふっ、さすが僕。英語完璧。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

教室は五十人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があった。

冷蔵庫には当然のように各種飲料や、お菓子を含めたさまざまな食料が、エアコンは教室どころか各人に１台ずつ。それぞれ調節可能だ。

さらに見渡すと目に付く数々の観葉植物や絵画。まるでどこかのホテルみたいだ。

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給いたします。他にも何か必要なものがあれば遠慮なく申し出てください。」

どこからか紅茶の香りが漂ってくる。早速設備を使って紅茶を入れた生徒がいるのだろう。

「先生、僕の冷蔵庫には『やっほーいお茶』が大量に入っているんですが」

「あ、私の冷蔵庫には『五右衛門』があるわよ」

「僕のところには『カントリーママン』がいっぱいあるね」

「それぞれお菓子などの種類が違うので、ほかの人と交換したりして交友を深めてくださるようにと学園長のお達しです。中身はきにしたら負けだそうですよ？」

さすがに『やっほーいお茶』が大量ってのはやりすぎだろう。美味しいお茶なんだけど…

「では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん、前に来てください」

「・・・・はい」

名前を呼ばれて席を立ったのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような少女。

物静かな雰囲気を持つ彼女はその整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放っていた。

クラス全員の視線が集まる。

クラス代表――――――――つまり二年生のクラスを編成する振り分け試験において、この教室内で誰よりも優秀な成績を収めた生徒。

更にいうなれば、学年で最高成績を誇るＡクラスでのトップはそのまま二年生のトップということになる。注目を浴びるのは当然のことだろう。

「・・・・霧島翔子です。宜しくお願いします」

そんな視線の先で顔色一つ変えずに淡々と名前を告げる霧島さん。

その目はクラスメイト全員に向けられているようで、よく見ると同性の級友たちにのみ向けられていた。

うん、噂は本当だったんだ。

彼女は、一年生の時から有名人であり、男子からの告白が耐えないほどの美しさを持っていた。

しかし、一人として彼女の心を動かしたものはおらず、そのことから、彼女は同性愛者じゃないかという噂が流れたのだ。なるほど、確かに火のないところに煙は立たないね。

「Ａクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽（けんさん）を重ねてください。これから始まる『戦争』でどこに

も負けないように」

担当教師の挨拶が終わる。っと、こうしてはいられない。僕も自分の教室にむかわないと。

僕は走り出さない程度に急いで教室に向かった。

同時刻・・・・

闇太サイド

ぷるるるる・・・ぷるるるる・・・・がちゃっ

『私だ』

「闇太です。定時連絡を・・・」

『前置きはいい。振り分けの結果は』

「・・・ミスにより、Fクラスとなりました・・・」

『・・・そうか。闇太、ひとつ任務を与える』

「はっ、なんでしょうか」

『もっとましなクラスになるまで定時連絡等連絡はしな―くていい』

「はっ・・・・・？」

『わかったか。要は設備がＡクラスになるまで連絡はするなということだ。返事！』

「・・・・・はっ。了解しました。これにて定時連絡を終わります」

がちゃっ

「・・・・時間がかかりそうだ」

明久サイド

二年F組と書かれたプレートのある教室の前で僕は少しだけ躊躇していた。

遅刻なんてしてきて皆に悪い印象を持たれたりしないだろうか。

嫌なやつや痛いヤツはいないだろうか。

今後一年間を共に過ごす人たちがどういう人たちなのか、不安でたまらない。

「なんて、考えすぎだよね」

うん、考えすぎだよね。たとえドアに黒板消しトラップが仕掛けられていても。

よし、大丈夫。何も心配はいらない。信じよう、仲間たちを。あの黒板消しも昭和的な落ちてくるだけの変わった挨拶だと信じよう。

そう思って、僕は勢い良くドアを開けた。

とたんに落ちてくる黒板消しを避け・・・

「すみません、ちょっとおくれ」

デッキブラシが倒れてくる。

「あがぁっ」

ウニが…いや、たわしが落ちてくる。

「いてててっ」

とどめに異臭を放つ雑巾。

「ぐぅぅおぉぉお！」

最後はさすがに無理だ！

鼻をつまんで吐き気をこらえる。

「ふっ、無様だな。さぁ、早く座れ、このウジ虫野郎」

さらに台無し。

「聞こえないのか？あぁ？」

それにしてもなんて物言いだろう。いくら教師とはいえ、礼を失しているにもほどがある。

僕はにらめつけるようにして教壇に立っている男を見た。

その背は意外と高く、大体１８０センチぐらい。やや細身ではあるが華奢ではない。むしろボクサーのような機能美を備えた細さを感じる。視線をもうちょっと上にやると、現れたのは意志の強そうな目をした野性味たっぷりの顔。短い髪の毛がツンツンと上に立っていてまるでたてがみのように見える。

「・・・・・・雄二、なにやってんの？」

彼は、僕の悪友、坂本雄二（さかもとゆうじ）だ。決して教師じゃない。

「先生が遅れているらしいから代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？何で？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

にやりと口の端を吊り上げる雄二。その言葉を聞いて僕も思わず顔が綻ぶ。つまり、雄二を説得したら、このクラスを動かせるってわけだ。

「これでこのクラスは俺の軍隊となるわけだな。」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイトたちを見下ろす雄二。

――――――――そう、クラスメイトは床に座っている。

どうしてか？理由は簡単。――――――椅子がないからだ。

「Aクラスとは大違いだ…ここは学び舎なんだろうか」

とりあえず、あいているスペースを探そう。

## 第3話「お前んとこは妹だろうが」BY心の声（前書き）

だいぶ改稿。

二人目のオリキャラ。

## 第3話「お前んとこは妹だろうが」ＢＹ心の声

明久サイド・・・

「おい、坊主ども。席についてもらえるか？ＨＲを始める」

不意に聞こえた野太い声に――――モロ鉄人だ――――に素早く席に座る僕と雄二。どうやらなれているようだ。

だが、その人は鉄人じゃなかった。

筋肉が外からみてわかるほどの鉄人に比べ、この人は見えない筋肉――――インナーマッスルというやつだろう――――が大量に付いている。

見えないはずの筋肉。けど、ひと目でわかる雰囲気。鉄人の親戚にしては印象がまったく逆の人だ。

闇太サイド・・・

担任らしき人は口を開いた。

「えー、おはよう。。二年F組担任の・・・」

やはり担任だったようだ。担任が自分の名前を書こうとして・・・

お、チョークが無――――

きゅっきゅっ

「小原源人（おはらみなと）だ。よろしく頼む」

・・・チョークがないからってホコリのたまった黒板に指で書くか、普通。

「全員卓袱台は不具合ないか。座布団はあるか。なにか不具合があれば言え」

五十人程度の生徒が所狭しと座っている教室には机が無い。あるのは、畳と卓袱台と座布団。

なんというか・・・その・・・斬新な設備だな。

まぁ、俺は和風が好きだから別段嫌というわけではないが、流石に粗末過ぎるな。後で卓袱台磨きでもしておくか。

「せんせー、俺の座布団にほとんど綿が入ってないですー」

お、さっそく不具合が見つかったか。流石に綿くらい・・・

「我慢だ」

なかった。綿さえないのか。

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されている」

くっつけろと。

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「了解した。ビニール袋とセロテープの支給を申請しておこう」

ふさげと。

「先生、卓袱台がないんですけど」

「あまりはないので届くまでダンボールで我慢しろ」

それあの蛇傭兵のものって名前書いてあるが。

つぎつぎとあがる不備を訴える声。しかし、どれも解決されていないような答えばかりだ。

「基本的に個人に任せることになっている。必要なものがあれば各自で用意しろ」

ん・・・この場合は放任主義ということでもないな。単純に予算なり材料なり足りないのだろう。

さすがFクラス。

「では、まどぎわから自己紹介していこう。あああああから」

なんて不便な名前だ。両親は名前を決めるときに喜びすぎて連打したんだろう。

あああああ君がしゃべっている間に俺は黒いノートを取り出す。けっしてデ〇ノートではない。

（…暗示せよ、我は孤独也、と）

俺は人物を確認するために知っている人も知らないと暗示をかけ、全く初対面の人のようにする。

そうすることによって深く人を覚えることができるからだ。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

つぎに立ったのは・・・女？なのか？男子生徒の制服を着ているが・・・

独特の爺言葉に華奢な体、肩にかかる程度の髪をゆったりと縛ったいでたち。よく見ても女子だが、このノートによると、れっきとした男らしい。

『木下秀吉。演劇部所属。姉の木下優子がいる。声まねが得意。姿は女生徒だが、男』

・・・本当なのか？女にしか見えないが・・・

「ーーーーーーというわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑みを作って自己紹介を終える秀吉。・・・謎だ。

「・・・・土屋康太。趣味は盗ちょ――録音。特技は盗さ――――写真撮影」

こりゃまた。

『土屋康太。基本的に無口。ある教科に限ってものすごい点数を発揮する。学名、寡黙なる性識者（ムッツリーニ）』

おいおい、学名ってなんだよ。研究でもされたのか？それにしてもある教科ねぇ・・・偏るのは良くないが期待できそうだな。

「島田美波です。海外育ちで、日本語はできるけど読み書きが苦手です。趣味は――――――」

ふむ。Fクラス数少ない女子の声だな。存外まともだと――――

「趣味は、吉井明久を殴ることです♪」

・・・なんなんだこのクラスは。変わった人間ばかりじゃないか。

「はろはろー」

笑顔で・・・明久に手を振る美波。

「・・・あぅ。し、島田さん」

「今年もよろしくね、吉井」

殴るとは・・・反抗期なのか？明久限定の。

その後は淡々と自己紹介が進み、俺の番になった。

暗示を解いてっと…

「薄刃闇太だ。去年は明久たちと同じクラスだったが、とある任務

で少し記憶をなくしていてな。正直去年のクラスメイトのこともあまり覚えていない。依頼さえあれば受けるなんでも屋の真似事をしているため、なにかあったら遠慮なく言ってくれ」

さて、気づく奴はいるかな…

さて。俺はある任務・・・とある犯罪組織の壊滅という依頼をうけ、警察と一緒になって犯罪組織を追っていた。しかし、途中で頭に鈍器による攻撃をうけ、意識を失ったらしい。自分のことなどは覚えているが、学園生活などの記憶はすっぽりと抜けてしまっている。知識などは家庭教師の変装などに必要なため、叩き込んだが、クラスメイトなどはまったく覚えていないのだ。

さきほど暗示をかけたりして人を覚えていたのも、また忘れないようにしたいからだ。

「えっ！覚えていなかったの！？」

突然明久が立ち上がる。

「ああ、今は名前などは覚えなおしたが、まだ顔が一致しない時もある。気づかなかったか？」

いろいろ会話で不自然な部分があったので、気づいているはずだが・・・どうやら気づいていなかったらしい。

「そ、そうだったんだ・・・」

ちょっと残念そうにしながら座る明久。

「まぁ、とにかく宜しく頼む」

とりあえず言い終え、座る。

「あ、次は僕か」

次は明久の番だ。

「ーーーーーーコホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

流石に呼ぶやつはいねぇだろ。

「「「「「「ダァァーーリィーーン！！」」」」」

・・・・ぐおぅ、耳が痛い・・・2重の意味で。

「・・・失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

明久も流石に嫌だったのか、作り笑いでごまかしながら席に着く。

『吉井明久。バカ×バカをしても足りないバカ。観さ・・・』

保存状態が悪かったのか文字が読めない。ま、重要なことだから見えなくしたんだが。

その後も自己紹介は続き・・・

ガラリ

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

「「「「えっ？」」」」

「ん？」

急に扉が開き、息を切らして胸に手を当てている女生徒が現れた。
あれは・・・・

クラスがにわかに騒がしくなる。そりゃそうだ。

「ちょうどいい。今自己紹介していたところだ。姫路が最後だな」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。宜しくお願いします・・・
」

小柄な体を更にちぢこめるようにして声を上げる姫路。

「肌は新雪のように白く、背中まで届くやわらかそうな髪は優しげで・・・」

「明久。声が出てるぞ」

「え!?な、なんのこと?」

「・・・・ま、いいか」

「はい!質問です!」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と手を上げる。

「は、はいっ。何でしょう」

登校するなり、質問が自分に向けられて驚く姫路。

「その小動物的な・・・」

「オイ明久。またもれてるぞ」

こいつは馬鹿だ。わかりきってるが。

「なんでここにいるんですか？」

聞きようによっては非常に失礼な質問が浴びせられる。

だが、このクラス全体の疑問だろう。

姫路は聡い。入学して最初のテストを学年3位で通過するほどだ。

・・・え？一位と二位はだれかって？1位は知らんが、2位は俺だ。ちょいと加減にミスった。

ごほん。話を元に戻そう。そんな彼女はもちろんAクラスだと誰もが思っているはずだ。

「そ、その・・・」

緊張するように体を硬くする姫路。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして・・・」

その言葉を聞き、クラスに納得したような空気が流れる・・・

試験途中での退席は０点扱いとなる。姫路は途中で倒れでもしたらしい。

そんな姫路の言い分を聞き、クラス内で言い訳の声が上がる。なにに・・・？

「そういえば俺も熱（の問題）が出たせいでＦクラスに」

科学の問題な。あれは簡単な問題のはずだが…

「俺は弟が事故にあったと聞いて気になってて」

お前んとこは妹だろ。

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

黙れ彼女いない暦１６年。

「お父さんが寝かせてくれなくて」

どんな家族だ。

「いつもの妹の添い寝がなくて」

「「「「「コロセッ！！！」」」」」

「すいません嘘ですっ！」

面白い。このクラス…楽しみだ。

## 第3話「お前んとこは妹だろうが」BY心の声（後書き）

先生は何に絡ませようかなぁ…

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6653y/

---

バカと文月とヤミ

2011年11月29日21時47分発行